

ボランティアの実像

～ボランティア概念を伝える上での教育における可能性～

第一章 研究背景および目的

第二章 ボランティアを取り巻く時代の潮流

第三章 ボランティアの歴史

第一節 概念と実態のずれ

第二節 日本におけるボランティアの歴史

第三節 ボランティアの特徴と問題点

第四章 教えるべきボランティア像

第一節 活動推進者の定義から見直すボランティア像

第二節 参与観察で見出したボランティア像

第三節 ボランティア教育の現場の考察

第五章 まとめ

第一章 研究背景および目的

「ボランティア」ってなんだろう。ボランティア、という単語は人々に色々なイメージを想起させる。「いいこと」、「多分いいこと」、「人のために何かをすること」、「見返りを求めず何かをすること」、「めんどくさいこと」、「偽善的なこと」、「悪いこと」。人の数だけたくさんボランティア像が存在する中で、ボランティアの実像、とは一体どのようなものなのだろう。この論文を通して私はそれを明らかにしたいと思っている。

なぜ、ボランティアの実像を明らかにしたいのか。それはボランティア活動やボランティア精神というものが、暮らしやすい社会を実現するために不可欠な役割を担っていると考えるからだ。人は一人で生きていくことができない以上、その人が所属している社会集団のために生きている、つまりアリストテレスのいう「人は社会的動物である」という言説は間違いではないと思う。ある人が所属する社会集団には、小さいものから順に、家庭、学校、職場、町、国などがあり、他にも趣味や研究など目的に応じた集団が多数ある。人

は、生きていくのに必要な衣食住や楽しみをそれらの社会集団から受け取る一方、なんらかの形で同じものを他の人のために返している。個人の能力によって返せるものは違うだろうが、それぞれ違う能力を持つ人間がたくさん寄り集まることで、それらの社会はうまく機能していく。ガッサン・ハージはこのような個人と社会集団との相互作用を「贈り物とお返し」の関係¹と呼んでいるが、つまり人が社会集団の中でしか生きられないとすれば、その集団や構成員のために何かをしなければならない、というのもまた当然のことなのだ。

人はいつでも「やりたい」、「やりたくない」といった自分の思いのみで動けるのではなく、時には「やらなければいけない」ことに取り組む必要がある。やらなければならないことに誰もが気持ちよく取り組めれば、全ての人が、その社会集団の中で過ごしやすく生きやすいと思えるだろう。「ボランティア」が一体何であるのか、という考察は次章以降に譲るが、「それぞれの人がそれぞれの立場から、行うべきことややったほうがよいことに対して自ら取り組み、その結果、暮らしやすい社会が少しでも実現する」ことこそが、「ボランティア」という概念だと考える。人と人との関係作りは、人々の生活基盤としての社会を支える重要な要素であるが、その関係作りにも、ボランティアという活動は新たな役割をすでに獲得しているのではないだろうか。

しかし、いくらボランティアの実像がそのようなものであったとしても、大多数の人々がそのようなイメージを抱かず、ボランティアをしている人々を無視する、あるいは冷たい視線を注ぐのでは意味がない。あるいは、誰もがボランティアと意識しなくとも、お互いを思いやり助け合い協力しあう雰囲気が出ていけば、それもまた生きやすさや暮らしやすさの条件になるだろう。だとすれば、人々の中にそのような考え方を根付かせるためには、どうすればよいのだろうか。

デュルケームが、人間の特殊さが社会性にある以上、その伝達も社会的な方途、つまり教育によってなされると語ったように²、私はその鍵が「教育」にある、と考えた。中でも中学校で行われる教育に着目してみたい。その理由は二つある。一つは、既に築き上げた概念を大人になってから崩すのは困難であること、もう一つは中学校での教育は日本に暮らす全ての人を対象に行われるということだ。同じく義務教育である小学校を考慮にいれないのは、小学生でボランティアについての知識を獲得したとしても、特に低学年では自分の意思によって行動に移すのが難しいと考えたからである。概念の構築、再構築を一気に行うのではなく、時間の経過とともに少しずつ変化させていければと思っている。では現在、中学校では「ボランティア」に関して、どのような教育が行われているのだろうか。

中学校教育における重要な教材の一つが教科書だ。学習内容の中でも分野や単位によっては、教師独自の指導体系や教え方を確立していることもあろうが、そうでない場合は教

1 ガッサン・ハージ著、塩原良和訳『希望の分配メカニズム』御茶の水書房、2008、149-151 ページ

2 エミール・デュルケーム著、佐々木交賢訳『教育と社会学』誠信書房、1976、4 ページ

科書に沿った指導が行われていると考えてほぼ間違いない。そこで試しに手元にある教科書を見てみると、ボランティアへの参加を促す記述についてこのようなものが見つかる。

「都市化が進行し、人間関係が疎遠になっていく中で、ボランティア活動やNPO（非営利組織）など、住民参加型の福祉活動も重要になってくるであろう」³

「ボランティア活動をおこなうには、何が必要とされているのか、自分に何ができるのかを、しっかりと把握しなければならない。また、そのための知識や技能も身につけなければならない。一方、社会のあり方を肌で感じることで、読書や教室での授業では学ぶことのできない、貴重な経験が得られる。このように、ボランティア活動は、必ずしも、人の手助けになる面ばかりではない。ボランティア活動は、自分の成長にもつながる活動なのである」⁴

内容にはもちろん間違いないと思う。しかしこの記述からでは、ボランティアの実像が描けそうもないのはもちろん、ともすれば、ボランティア活動に対する「ただの自己満足的イメージを補強してしまうのではないか。教師の側が適切なフォローを行えばよいが、教師といえども人間であるし、彼、彼女自身がボランティアに偏ったイメージを持ってしまっていたら元も子もない。この教科書は高等学校のものではあるが、中学校のものでも状況は同じであろう。このような教育上の積み重ねが、現在の「ボランティアイメージ」を形成しているのではないかと考えられる。

だとすれば、教育において有効なボランティアイメージを人々に根付かせることは不可能なのだろうか。私は、そうではないと信じたい。教科書による教育のみにとらわれず、教育によってボランティアをどのように伝えられるか考察するのが、この論文のもう一つの目的である。

第二章 ボランティアを取り巻く時代の潮流

第一章において、ボランティアの実像を明らかにしたい理由が、この社会を少しでも暮らしやすくするためだと述べた。では実際、現在の社会はどのような様相をえがいているのだろう。「現代的なボランティアの特徴は、ボランティアという活動や事象が生起している『社会そのもの』を理解しない限り、理解できない」⁵と語られるように、現代社会においてのボランティアを理解したければ、それが一体どのような社会的背景から生まれ出たものか考察することが欠かせない。「解決したい」、「解決すべき」問題が何もない所には、

³ 『高等学校 改訂版 現代社会』第一学習社、2002、37 ページ

⁴ 『高等学校 改訂版 現代社会』第一学習社、2002、73 ページ

⁵ 関嘉寛『ボランティアから広がる公共空間』粹出版、2008、11 ページ

活動も起こりようがないからだ。つまり逆にいえば、今の社会の様子を適切に把握することができれば、そこからどのようなボランティアが発生するのか、またボランティアに対してどのような可能性を見出す余地があるのかを考えることができるだろう。そのように仮定し、近代以降の社会情勢を概観しようと思う。

私たちは現在、いつでも自分の思考や行動様式を定めてくれるような、大きな価値観を抱いているだろうか。つまり、自分だけでなく社会の誰もがそれに方向づけられ、共有していると信じるに足るような何かの筋書きを持っているだろうか。近代においては、そのような「大きな物語」を、社会の構成員が共有していると考えられていた。そして、その物語が解体し存在しなくなった今日の社会を、ジグムント・バウマンは液状化する近代、つまり「リキッドモダニティ」⁶と名づけた。リキッドモダニティについてジョック・ヤングは、それは今まで確固たる物として信じられていた構成要素が、形を失い流動化してしまった社会のことであり、その中で不安定になったものとは規範や制度や社会的カテゴリーであると述べている。ヤングの議論⁷をもとに、この後期近代社会を眺めてみよう。ここでは、大量移民やツーリズム、労働様式の変化、コミュニティの不安定化や崩壊、メディアの隆盛、大量消費主義、個人主義と自発性の理想化などが、社会にこの流動性、不安定さをもたらしている。流動性をもたらすものの中で、大量移民を例にとってみる。国内に大量の移民が流入すれば、言葉が通じなかったり、彼ら、彼女らが自分たちと異なる文化になじんでいたりすることによって、今まで通用した規範が使い物にならなくなるのが考えられる。制度も場合によっては「想定外」のケースが多くなりすぎて、既存のものでは対応しきれなくなるだろう。社会的カテゴリーにおいては、今までの生活であまり感じなかった「〇〇人」という意識を、強く感じるようになる人が出てくるかもしれない。そのような個人および、それを取り巻く社会の変化そのものが流動性と呼ばれると考えられる。

では、流動化は社会に何をもたらし、どのような影響を与えるのだろうか。それは「文化やルールにおける今までの境界線の揺らぎと消滅」である。なぜならば、確固たる枠組みの中にいるという個人の安心感が失われることで、自分がいたり置かれていたりする場所が様々な選択の結果であり、少し違えば他の選択肢を選ぶ可能性も十分あったと想起させるからだ。「自分のいる場所」と「いない場所」に大差がないと感ずることで、その境目は曖昧になっていく。そして、自分が今までがっちり埋めこまれていたと感ずる場所から取り出され、揺らぐ境界性の狭間に立たされることから生まれる二つの方途が、社会的公正への再分配アプローチと、アイデンティティについての脱構築アプローチだ。

社会的公正への再分配アプローチとは、今までの立場や階級が崩れたことで、それに固

⁶ Zygmunt Bauman, *Liquid Modernity*: Polity Press, 2000

⁷ ジョック・ヤング著、木下ちがや、中村好孝、丸山真央訳『後期近代の眩暈』青土社、2008

定されない報酬分配の可能性を見出せるようになることだ。その際に分配の基準となるのが個人の能力であるため、後期近代の報酬分配は能力主義に基づいているといわれる。次に、アイデンティティについての脱構築アプローチとは、今まで固定された枠組みの中で感じられていた自己の基盤が揺らぐことで、新たな拠り所をさがさねばならなくなることだ。存在論的基盤が不安定になるということは、その一方でアイデンティティを再創造する可能性を生み出す。そこで、他者から与えられるのではない、自らが生み出す新たなアイデンティティとして、自己物語を作ろうという発想が支配的となるのである。

自己物語を作り出すために忘れてはならないのが、その物語を構成する要素だ。その際には個人を取り巻く環境、例えば、仕事、家庭、自らが所属するコミュニティなどが要素としてあげられるだろう。しかし、後期近代においては、その要素自身が不安定になっている。能力主義であり、やる気しだいで報酬が約束されると教え込まれた仕事については、「評価されない」、「生活を支えるのに足りない」といった問題が生じる。おまけに、生活を成り立たせるためのはずの仕事が、不規則な勤務形態や業務体系によってその生活自体を侵害してしまう。家庭に帰っても安息はできない。家族というのは、無条件で個人の存在を承認してくれるものだったはずなのに、社会の変化という外部要因に惑わされるようになる。つまり「外で承認されるかどうか、ここでのあなたの価値を決める」、というわけだ。そこで家庭でも得られない承認を獲得しようと新たなコミュニティに参入しようとするれば、検討のために事前に与えられる情報はごくわずかである。コミュニティ構築は計算的に行わざるをえず、自己物語の肯定的な要素になる確証はどこにもない。

アイデンティティの脱構築アプローチについては、もう一つ危惧しなければならない問題がある。それが、自分が今いる場所の絶対視という本質主義に陥る可能性だ。ここでの場所とは単に位置的なものにとどまらず、階級、ジェンダー、エスニシティ、国などを含む文化的なものに及ぶ。自分を守っていた境界が融解したことへの不安感から、自己を守るために新たな障壁を作ろうとする「他者化」のプロセスが、これにあたる。他者化とは逆に言えば自己を絶対することであるが、そこで与えられる自己の価値とは絶対的なものではなく、他者との対比によってもたらされるものだ。この対比には二種類が存在し、一つは他者を否定することで逆説的に自らを肯定するもの、もう一つは他者を何か不足している存在とみなすことで、その状況が改善されれば他者も我々のようになるのに、と考える態度である。どちらも他者を自分とはかけ離れた「他者」にしてしまうことで、社会問題を押し付け、社会構造そのものが問題を抱えていることを覆い隠してしまう。

見てきたようにヤングの議論によれば、現在の社会は、個人が自らの居場所を探さねばならないのに、そのフィールドとなる社会の構成要素自体は流動化していつてしまうという、その構造自体に大きな問題を抱えている。日本国内でも、社会の生きづらさをテーマにした著作はいくつも生まれており、例えば萱野稔人は『生きづらさについて』の中で「いまの流動化した社会のなかで、無条件に存在が承認されるような居場所をどのようにつく

っていか」⁸ということが難しい課題だと語っている。そのような問題が構造ゆえに生まれている、というのが一つ目の問題であり、人々の意識が元凶である構造ではなく、特定の人々を非難し排除する方向へ向かっているというのが二つ目の問題だ。また、そもそも社会構造の中に「生活しづらい」、「生きづらい」存在として位置づけられている人々がいることも、大きな問題の一つである。そして、たとえ問題の本当の所在に気づいた人がいたとしても、規模が大きすぎるゆえに太刀打ちのしようがない。ゆえに、原因と結果はそのまま放置されることとなり、それがさらなる構造の強化につながる。

では、私たちがこの問題に立ち向かう方法は本当にないのだろうか。特定の人々に責任を押し付けるのではなく、特定の人々に社会の不合理性を押し付けるのでもなく、問題そのものにアプローチをする手段は存在しないのだろうか。それが、「ボランティア」という行動ではないかと私は考える。

実際、そのような目的意識でもって、ボランティアに取り組んでいる人々はたしかに存在する。自分一人ではなんともできない社会問題に、ボランティアとして少しでも関わってみようという意識である。日本において、一九九五年がボランティア元年と呼ばれていることもその一つだろう。阪神淡路大震災のニュースをうけて、多くの人々が被災地に救援物資を送ったり、身一つで神戸に飛び立ったりした。震災そのものは社会構造が生み出した問題ではないが、震災後人々がどのように生活を立て直すのか、どのように街を再建していくか、どのように精神的な面でのフォローを行っていくかというところでは、社会システムや人と人とのつながりが大きくものをいうことになる。その他にも例えば、特殊な状況下や日常生活において様々な困難や不都合を抱えている人はたくさん存在し、そのような人々に対するボランティアの方も枚挙にいとまがないが、それらの全てが実際に対面している人を支援しながら、その後ろに控えている社会問題に目を向けるという作業を必要とするだろう。

このような人々が実際にボランティアをしてみて抱く感想は人それぞれであるし、彼ら、彼女らに対する世間の反応もまた様々だ。しかしその中で私はある特定の見方に着目してみたい。要するに、ボランティアに取り組む人は個々のそれぞれ違う思いを抱えて現場に飛び込んでいるにも関わらず、彼ら、彼女らを見つめる世間の視点は「ボランティアだから彼は良いことをしている」、「彼女がやっているのはボランティアだから偽善的なものだ」というふうに、背後にある問題を見つめず、「ボランティア」というカテゴリーでもってその行動を評価する傾向にあるということだ。もちろん世の中には、ただ単に「ボランティアをやってみよう」という思いから活動をスタートさせる人も大勢いるとは思いますが、そんな人でさえも、活動を続けるうちに「ボランティア」以上の別の思いを抱くようになるものではないか。このような、ボランティアを「やる人」と「見る人」の間のずれについて、

⁸ 雨宮処凛、萱野稔人『生きづらさについて』光文社新書、2008、166ページ

次章で追究してみたい。

第三章 ボランティアの歴史

第一節 概念と実態のずれ

そもそも、ボランティアに対する私の問題意識は、「ボランティアってなんだか胡散臭い」と感じたところから始まっている。ボランティアにも様々な種類があるが、植林事業や清掃活動などではなく人を相手にするものについて考えれば、一見「人と人との関わり」が基礎になっているようで、その実ちっともそんなことはない。なぜならボランティアを行う人は、受け手個人や受け手の個性に興味を持って活動を始めるわけではないからだ。活動を始める最初のきっかけは、「子どもたちと関わることのできるボランティアをやってみよう」だったり、「日本で暮らす外国人に興味があるから、彼らの支援をするボランティアを探してみよう」だったり、ある集団やカテゴリー単位のまとまりへの興味関心であることが大半だろう。受け手一人ひとりとの「関わり」や「信頼」が生まれるとすれば、それは活動がスタートした後の話であり、決して最初のきっかけがそれではない。一旦活動が始まってしまえば、「信頼」というものが存在しないとけっして上手くはいかないという側面もあるが、人それぞれであるボランティアを始めるきっかけのどれもに共通するであろう「見ず知らずの他人のために何かをしよう」という気持ちが、私にとっては「偽善」に感じられてしまう。ゆえに、ボランティアという響きそのものが、嘘っぱちに聞こえてしまっていたのだ。しかし、そんなボランティア活動に、今私は積極的に取り組んでいる。なぜ取り組むようになったかといえば、学校の授業のフィールドワークで現場に飛び込む機会があったからだ。最初は授業で現場を訪れていたが、そこで「人手が足りない」、「理解者が少ない」という話を聞き、「ならこういう問題に興味関心があり、なおかつ通いやすい位置に住んでいる自分にできることならばやってみよう」と思ったのだ。最初のきっかけはそのようなものだったが、活動を続ける中でも「自分嘘っぱちだなあ」とはあまり感じたことがない。むしろ、もともと自分がボランティアに対して否定的なイメージを持っていたために、自分が行っている行為と、それを名づける「ボランティア」という響きに、何かずれすら感じた。このように、私の身近な体験からも、ボランティアに関するある種の齟齬を見出すことができる。

ここで次節を先取りしてボランティアの歴史をさかのぼってみると、古くは古代文明期に端を発する。相互扶助というものは生活保障の社会制度が未整備の時代においては、住民の生活を支える重要なはたらきであった⁹。お金を介さない、生活を成り立たせるための

⁹ 中嶋充洋『ボランティア論—共生の社会づくりをめざして』中央法規出版、1999、6 ページ

助け合いはその後社会が発展し社会保障制度が整備される中で縮小されていくが、現在も消滅することなく存続している。それが、現在ボランティアと呼ばれるところのものにつながっていることは間違いないだろう。また「ボランティア」を無理やり日本語に訳してみようとする。おそらくそれは、「篤志」や「奉仕」といった言葉になってくるだろうが、その起源もかなり昔のこととなる。後期封建国家（江戸時代）には、篤志家による私的援助活動が盛んに行われるようになり、これが、ボランティア活動が篤志家活動といわれる所以でもある¹⁰。しかし、現在のボランティアが篤志的、あるいは奉仕的な側面を持つかといわれれば必ずしもそうではないというところが、実は概念と実態のトリックをひもとく鍵となるのだ。

中山淳雄はこのずれのことを「体験と概念の間に生じている違和感」と称し、ボランティアという語に内包されているように感じられる欺瞞は、「体験としてのボランティア」と「概念としてのボランティア」のずれから生み出される、ということを明らかにした¹¹。なぜ両者にずれが生じるのかといえ、このわずか二十年ほどの間に「ボランティア概念」が大きく変化したからだ。中山はボランティア概念を研究する上で、大阪ボランティア協会という団体が一九六〇年代から発行している「月刊ボランティア」という冊子における言説分析の手法をとった。大阪ボランティア協会は一九六五年、全国に先駆けて誕生した市民活動サポートセンターであり、「ボランティア」を最も長い間主張しつづけている民間団体の一つである。大阪ボランティア協会発行のニュースレターを分析対象とする理由については、当協会がボランティアの一般的な定義に影響を与えているからではなく、人々がボランティアをどのように受け止めているかについて最も敏感に反応し、自らの定義もそのような反応や変化との兼ね合いで設定し直し、なおかつそれを同じ形式で発行し続けていると考えられるからだ、と説明されている。中山淳雄の議論¹²をもとに、「ボランティア」という名称が経験してきた概念の変化を、次節において一九六〇年代以前から十年ごとに見ていこう。なお、特に明記のない場合、議論は彼のものを下敷きにしており、「協会」とは大阪ボランティア協会のことを指すものとする。

第二節 日本におけるボランティアの歴史

<一九六〇年代以前>

関嘉寛によると、日本におけるボランタリーな活動は、民間の社会事業や学生のセツルメント運動という形で一八八〇年代頃から存在していた。戦後設立された、共同募金運動

¹⁰ 中嶋充洋『ボランティア論—共生の社会づくりをめざして』中央法規出版、1999、10 ページ

¹¹ 中山淳雄『ボランティア社会の誕生～欺瞞を感じるからくり～』三重大学出版会、2007

¹² 中山淳雄『ボランティア社会の誕生～欺瞞を感じるからくり～』三重大学出版会 2007

(一九四七年)、赤十字奉仕団(一九四八年)などの諸団体もあわせて、これらは主に社会福祉分野での活動であり政府からの公的な助成も行われていたのだが、占領軍による政策で助成が禁止されてしまった。そこで財政危機に陥った民間団体にかわって社会福祉を担うことになったのが、国が認めた社会福祉法人である。こうして、「社会福祉はすべて国の責任である」という考え方が形成された。このような認識の中で民間によるボランティアな活動は時代遅れ、あるいは国や地方自治体など行政の責任転嫁を招くという否定的な捉え方が広がっていった¹³。

その後一九六〇年代に入ると、日本は高度経済成長期を迎えることになる。その中で、所得格差の拡大、公害をはじめとした生活環境の悪化、都市化の進展によるコミュニティの解体など、新たな社会問題が出現しだした¹⁴。生活の危機に直面し、自らの生活を守るために立ち上がろうとする人々が増えたこの時期に設立され始めたのが、大阪ボランティア協会などの、ボランティアに関する活動を行う先駆的な民間団体だ。

これらの団体が、専門家の間では戦前から輸入され使われていた言葉でありながら、一般人にはなじみの薄い「ボランティア」という言葉を自らの名称に用いたのはなぜだろうか。「篤志」や「奉仕」など、日本語にもわかりやすい言葉はあったはずである。これについては、行政との関係性を理由としてあげることができる。日本にはその当時すでに民生委員など行政と結びついたボランティア的活動が存在していたのだが、その活動が「奉仕」などの言葉で説明されていた。戦後、政府主導のボランティアな活動に対して抱かれていた否定的なイメージを払拭したいがゆえに、篤志や奉仕といった言葉も敬遠されたのである。まず確認しておくべきことは、新しい活動が発生したために「ボランティア」が登場したのではなく、「奉仕」という言葉のもとで人々が活動することを拒否したために代替的に使われ始めたということだ。「ボランティア」とは、もともと存在していた言葉の否定的イメージを脱却するために恣意的に用いられ始めた用語であり、そのような経緯ゆえに、実態から離れたところで様々な概念の変化を経験することになったのである。

この年代のボランティアの特徴をまとめてみよう。「奉仕」および行政からの脱却を図ろうとした「ボランティア」活動であるが、その言葉がまだ人々に知られていなかったゆえに、翻訳語として用いられたのは結局「奉仕」という言葉になってしまった。行政との関わりについては、行政による社会福祉の穴埋めに過ぎないのではないかとの批判が目立った。また現在でも議論されることの多いボランティアの無償性についてであるが、実費支給を超えての金銭のやり取りはご法度だった。さらに、ボランティアの目的については利他性が厳守されていた。この、「ボランティアとは他人のためにすること」という善意の視点は「ボランティア」という言葉が内包するものではなく訳語として用いられた「奉仕」

¹³ 関嘉寛、『ボランティアから広がる公共空間』梓出版、2008、71-72 ページ

¹⁴ 関嘉寛、『ボランティアから広がる公共空間』梓出版、2008、73 ページ

の概念から生まれ出たものであるはずだが、協会においてもまだ六〇年代においては活動を促す用語として用いられていた。

<一九七〇年代>

七〇年代に入ると、社会福祉協議会や他の民間団体でも「奉仕」から「ボランティア」に表象の乗り替えをする例が見られるようになる。これは名称としてのボランティアだけでなく、活動としてのボランティアに対する認知度が高まり、奉仕とボランティアは別物だという認識が広まってきたことによるのだろう。これらの団体が新たに「ボランティア」という概念を導入する際には、「奉仕」という概念との二項対立的なレトリックが用いられた。現在、「篤志」や「奉仕」という言葉を聞いたときに、私たちがどこことなく、古臭いなと感じたり押し付けがましい気持ちを抱いたりするのは、この時代に「ボランティア」を良いものとして普及させるため、「奉仕」の側にあえて否定的な意味を与えるレトリックが用いられた影響が少なからずあるのかもしれない。

ボランティアという名称と活動が少しずつ普及しだしたこの年代の特徴をまとめてみよう。行政との関わりについては、単に関わりを否定するにとどまらない動きが起こってきた。社会福祉の問題解決は行政の役割であるとする福祉国家論がいまだに根強かったので、色々な社会問題に対して行政の仕事を批判するという「批判性」の側面が見え始めたのだ。また、財政的な問題から、行政との関わりを模索する立場も現れはじめた。

ボランティアが少しずつ一般化し始めたこの年代においては、活動の先導者だけでなく、参加者の意識も変化し始めた。それまでは奉仕という翻訳語が当てられていたがゆえに利他的な側面が強調されていたのが、「自分のため」に活動を行う人が増え始めたのだ。こういったことから、ボランティアという言葉が一般化し報道などでも取り上げられるようになってきたであろう状況が推測できる。

またこの年代には、これまで主に社会福祉分野でなされてきたボランティア活動に対して、社会教育の分野からもアプローチがなされるようになった。教育にボランティアを有効活用できないか、という観点である。例えば、社会の高齢化が進み自宅で孤独死する高齢者が増えたとする。そういうときに社会福祉の分野からは、一人で孤立する高齢者が出ないように、「委員が自宅を訪問する」ことだったり「地域の集まりの中に高齢者を取り込む」ことだったりといった対策の中でボランティアの力を生かそうとする。一方社会教育の分野からは、「今社会において高齢者が孤独死する問題が起きています。こんなときにあなたはどうしたらいいと思いますか」という問題提起がなされ、自分たちの生きる社会においての問題に自ら積極的に立ち向かうために、ボランティアという手段が取り扱われたり用いられたりする。このように別々のアプローチをとる二つの分野が、行政の中でも厚生省（現在は厚生労働省）と文部省（現在は文部科学省）に管轄が分かれてしまっているため、お互いのお互いに対する批判をよび、七〇年代には分断が大きくなることとなった。

教育分野からのアプローチに際して生まれた批判は主に二点に集約される。自発性を教育するという矛盾についてのものと、ボランティアの対象者を教育のための手段化してしまう危険性についてのものだ。協会も、基本的人権などの認識が育っていない状況でボランティア体験を安易に指導することで、活動が「奉仕というあやまった捉え方」になってしまうことへの懸念と、ボランティアが他の問題を解決するための安易な「手段」として扱われることへの批判の意を表明している。ようやく「奉仕」から「ボランティア」への表象の乗り替えが起こり始めた七〇年代において、他分野から口出しをされてその動きを抑制されてはかなわないという思いがおそらくそこにはあっただろう。しかし、七〇年代も末になると少し情勢が変わってくる。学校現場の荒廃が目立ちはじめたのだ。この問題は教育界隈にとどまらず、社会問題として広く取り上げられるようになる。学校現場の問題が社会の共有すべき問題になってしまったこの時に、解決手段として脚光を浴びたのが「ボランティア」であった。

<一九八〇年代>

この頃になると、「ボランティア」と「奉仕」との関係性に新たな動きが見られる。「ボランティア」が「奉仕という翻訳語では捉えきれない」とする言説が増えてくるのだ。八〇年代においてはこのような語りは先駆的な団体においてなされるばかりであるが、少し遅れた一九九〇年には朝日新聞の天声人語でも「それ（ボランティア）は社会奉仕、善意、善行といった言葉や意識では、とらえ切れない。…いま広がっているボランティアの姿を見誤るかもしれないと思う」と語られる¹⁵。つまり、ボランティアが今までの概念をこえて新たな意味を獲得したことが、一般に了解されはじめたのだ。ボランティアが奉仕からの脱却に成功し始めたこの年代の特徴をまとめてみよう。

まず、「ボランティア」と「行政」との関係性に変化がおとずれた。ボランティアか行政かという二元論でも行政の穴を埋めるボランティアという補完論でもなく、「協働」という考え方が生まれ、浸透し始めたのだ。財政的援助が不可欠という側面や、ボランティアだけでは国の社会福祉を全面的に担うことが不可能だという視点から、これまでのように行政の関与を一方向的に批判するような言説は逆に代案のない空論として扱われるようになる。さらに財政の面では、福祉業界で巻き起こった在宅福祉の議論もボランティア概念に影響を及ぼした。これまでの施設収容型の福祉が問題視されるようになり、家族を中心とした在宅活動が新たな福祉の場として考えられ始めたことで、ボランティアを「したい人」と「してもらいたい人」の間に行政や施設を挟まない関係が多く生まれることになったのだ。そして、この一対一の関係を円滑なものにするためには一定の謝礼金を決めて行うほうが機能的であるという考え方が広がったことで、これまで主張されてきた無償性との食い違いが生じた。

見てきたように、ボランティア活動は財源の必要性ゆえに行政との関わり方を模索せざ

¹⁵ 朝日新聞 1990年3月25日「天声人語」

るをえないなど、お金の問題に対しては非常にシビアな状況に置かれていた。そのような中で、ボランティアを必要とする人の了解のもとに費用を確保することができるなら、むしろ良いことのはずである。ではなぜ有償ボランティアが論議の対象になったのかといえ、それは「有償ボランティア」という名称そのものである。「ボランティア」という看板は、それまでの「奉仕」に対するイメージを払拭するために恣意的に用いられ始めた過去があった。協会などの先駆的な団体にとって、「ボランティア」には、単なる名称以上の意味があったのである。この論争は八〇年代後半において、「有償ボランティア」にかわり「在宅福祉サービス（有償サービス）」と命名することによってひとまずの解決を見た。

また、福祉に関する考え方が変化したことは、ボランティアの持つ「批判性」にも影響を及ぼした。「社会福祉は国が行うもの」という考え方が主流だった時代においては、福祉は上から下に向けて行われる社会政策の一環という意識が広がっていた。しかしその考え方が息をひそめるにつれ、ボランティアの、行政への批判的役割も重要度を低めていった。その代わりに、以前の役割を乗り越える概念としてボランティアの名称の中に含まれ始めたのが「市民活動」という働きである。七〇年代の市民運動を乗り越えて、新たな「参加」の形態としてボランティアが浮上してきたのだ。参加対象としてのボランティアは、別の側面からも語ることができる。つまり、「他人のためのボランティア」から「自分のためのボランティア」への変化と、その肯定だ。自発性や、他人のためという意義ばかりを尊重して、それがなくなってしまうとたんに活動を止めてしまうという無責任な立場が広がらないためにも、参加者の「楽しさ」を確保して活動を継続してもらうことが大切なこととして考えられるようになってきた。しかし認識の転換は活動者の言説レベルでは起きているが、一般的な「ボランティア」概念はそこまで発達していない。

この年代において、もう一つ見逃せない重要な変化が「教育」から「学習」の転換だ。八〇年代において、従来の社会教育、生涯教育といった「教育」という言葉にかわって、生涯学習などといった「学習」という言葉が使われ始めた。この転換は、単なる言葉のロジックにとどまらず、「教育」という言葉が内包する指導的側面が取り除かれたことで学習者の自発的な側面が強調され、自発的活動を「教育」という矛盾が解消されたのだ。また、もう一つ議論の対象であった「手段化」への批判だが、これも息をひそめることとなった。学校現場の荒廃や生徒の荒れが目立ちはじめたことで、教育効果が認識されつつあったボランティアは有効な手段として見られるようになっていったのだ。「手段」として捉えられてはいたものの、それが肯定的な評価に形を変えたことになる。

<一九九〇年代以降>

九〇年代に入ると、ボランティアと行政との協働関係がより一層模索されるようになる。すでに行政関与に対する一方的な批判が消滅していたことに加え、行政の側からも「ボランティア」の推進に対する本格的な姿勢が見られたことによってボランティアに期待が集

まり、それを受けて逆に「ボランティアの限界」を見据えた言説が増えてくる。そして政治への関わり方に「批判」から「提案」という認識の転換が起こるようになった。社会の中の新たな問題に気づき、それを批判するだけでなく解決の方向性を行政やその他の機関に対して提案するということが、新たにボランティアの概念の中に織り込まれることとなったのである。すべてをボランティアでまかなうことが不可能な中、「ボランティアがどこまでできるか」という限界を見つめることで、逆に新たな可能性を見出していこうとする動きだ。

八〇年代で一応の決着を見た「有償ボランティア」論争については、もはや有償か無償かといったことは問題にならずに、技術的に「どのように有償にしていくか」ということが議論されるようになる。ボランティアを有償化することで実現できる様々な利点への期待感が高まっていくのだ。この議論は最終的に、有償化されたボランティアの中の「ボランティア性」に着目しようという決着を見る。たとえ有償だったとしても、その活動の中にはボランティア的要素がゼロではないはずだというわけだ。実際は、これ以後の定義にも「無償性」が依然として理念にあげられているが、「無償性」がそれまでのような金銭レベルのものではなく、精神的な報酬を含めた上で緩く捉えられるという認識変化が起こっている。ここに現在におけるボランティア概念の多義化の兆しが見えてくる。

また、ボランティア活動から何かを得たり、生きがいを見出したりという「自分のためのボランティア」言説はこの年代において、協会など活動主体だけでなく一般的に常套句として使われるようになる。こうした言説が普及した背景には、阪神淡路大震災を経て、ボランティアの活動者というものが一般的に目に見える形として現れるようになったことがあるだろう。しかし、ボランティア活動に楽しさを見出したり、「自分のため」としてボランティアを捉えたりすることは、自分自身が「活動者」の立場でボランティアに関わってみないと実感しづらいことである。そのため、ボランティア活動をしたことがない人々は、「正しさから楽しさへ」という変化についていけないことになる。八〇年代後半からの認識の転換は、まさに活動を個人の視点で捉え直す参加者と、従来の活動に対する認識を保っている不参加者との溝を深くすることになるのだ。

以上が、中山淳雄の議論をもとに年代別にまとめたボランティアの歴史である。時代とともにボランティアの捉えられ方が変わり、概念が変容していった様子が読み取れる。ボランティア活動を実際にやってみたときに私たちが感じる「ずれ」、それは概念と実態とのずれである。というよりは、「ボランティア活動を経験した人の概念」と「経験したことのない人の概念」という二種類の概念があって、その間には時の長さや歴史の深さという断絶が存在しているために、なかなか飛び越えづらいということなのかもしれない。次節では、ここから読み取れるボランティアの特徴をまとめ、問題点と可能性を整理してみる。

第三節 ボランティアの問題点と可能性

ボランティアの歴史を見てきた中で重要だと思われる、ボランティアの特徴をまとめてみよう。

まずは、「奉仕」との関係性である。「篤志」や「奉仕」といった冠が否定されることから日本における「ボランティア」はスタートしたわけだが、その後も奉仕という概念は引きずられることになった。つまり、見返りを求めずに相手のために何かをするのがボランティアという、活動を一方的なものとして捉える考え方である。この奉仕からの脱却に成功したところから、ボランティアという概念は多義的なものとなっていったと言えよう。

脱却による多義化の一つ目が、行政との関わりの変化である。奉仕の否定は行政との結びつきの否定ともつながっていたため、その否定を抜け出し脱却することで新たな関係性の構築が可能となった。財源の確保、批判から提案へ、市民運動から市民活動へといった形で、「協働」というあり方が模索されている。このような認識の変化は、現在の社会の状況を踏まえた上で、いくらボランティアとして目の前の課題に対処したところで問題の根本的な解決にはならないという、問題の実際の所在に気づき始めたことから起こったのだろう。ボランティアを自己満足な活動に終わらせないための挑戦といえるかもしれない。

それと関わる二つ目が、無償理念からの解放である。これについては無償から有償へという変化よりも、「どんな活動でもその中にあるボランティア性に着目しよう」という視点のほうが重要であると考えたい。なぜかといえば、重要なことは人々が「ボランティア活動」と名の付くものに取り組むことではないからだ。たとえ名前が何であったとしても、見知らぬ人と殺伐とした距離感を保つばかりでなく、ボランティア的な関係を築いていくというのは大切なことだろう。精神的なやりとりでさえも、「ボランティアで得られるもの」として扱われるようになったのは特筆すべきことだ。また、ボランティアで得られるものが明確になったことで、ボランティア自体が「他人のため」から「自分のため」と捉えられるようになったことも押さえておくべきだろう。

ここまでは肯定的に捉えられる特徴ばかりであるが、問題点も依然として残っているのを忘れてはならない。まず、ボランティアを広めるためにはそれを教育することがおそらく必要不可欠であるが、その際に「自発性を教育する」という矛盾が出てきてしまう点である。これは、ボランティアに「自発性」が必要かといわれれば必ずしもそうではないので一概には言えないが、忘れてはいけない大事な論点だろう。たとえ「教育」から「学習」へというロジックの転換があったとしても、「自発的な学習をするように仕向ける」のでは全く矛盾が解消されていない。いまだに「ボランティア学習」に対する批判が根強いことはこの問題を象徴しているだろうし、これは「人々が最新のボランティア概念を理解していないから」という、「概念と実態のずれ」に回収できるものでもないだろう。もしボランティアの実像を知れば人々がそういった批判をすることもなくなるというのなら、現時点

でそうっていないボランティア教育のあり方に批判を加えるべきだ。

また、さらに重要なのは、「ボランティアの手段化」問題である。ボランティアを通して社会問題を解決したり何かを得たり学んだりするためだったら、ボランティアそのもの、引いてはその向こうに存在する相手をその手段として使用していいのか、という問題だ。しかし、ボランティアを手段として捉えるようなやり方で、ボランティアの目的は達成されるのだろうか。歴史の中では「どういった要素を持っていればボランティアなのか」ということばかりが議論され、「何を目指していればボランティアなのか」、「何を成せばボランティアなのか」といったボランティアの目的は明確化されなかったように思う。だが広く捉えれば、誰もが暮らしやすい社会を作ったり、自分が少しでも生きやすいよう行動したりすることがボランティアだろう。手段化され、道具のように扱われた人々が生きやすいと思えるはずがない。相手の立場や気持ちを考え動くこと、あるいは協働して何かを作り出すこと。それが無くては、たとえ名前がなんであったとしても、それをボランティアとは呼ぶことはできないのではないか。

以上のような特徴と問題点から、第二章での議論も踏まえて、ボランティアの可能性について考えてみよう。

私たちの生きる後期近代は、様々な局面で社会の構成要素が流動化し、人々が確固たる自分の足場をすくわれ不安定な状態に立たされている時代だった。そんな中で人々は、自らのアイデンティティを確立させるために、他者化という手段に走りがちであった。社会の中に自分とかけはなれた存在である特定の「他者」がいるとし、その「他者」に社会問題を押し付け、社会構造そのものが問題を抱えていることを覆い隠す態度である。その他者は例えば移民であったり、障害を抱えた人であったり、老人であったり子どもたちであったり、あるいは自分とは全く違う意見を持った人々であったりする。自分の生きやすさのために、まさに他者を「手段化」しがちであったのが、後期近代の潮流だった。

今の社会が抱えている問題に対して、この手段化のアプローチとは全く違った二つの手立てを持つのがボランティアであると思う。一つは、自己物語の充足としてのボランティア、もう一つは、自己物語におさまらない社会変革の足掛かりとしてのボランティアである。これを仮に、「自己物語のためのボランティア」、「社会変革のためのボランティア」と呼ぶことにしよう。

自己物語のためのボランティアとは、他者との関係性の中で自らの居場所を確定させていこうという試みである。ボランティアをされる人だけでなく、ボランティアを通して関わることになる問題全体を広く「他者」と捉え、それとどう関わるか、どう向き合うかで自らの立ち位置を模索する。自分はなぜこの問題に興味があるのか、どうして興味にとどまらず実際ボランティアという行動にうつしたのか、そこで生まれた人とのつながりを自分はどう解釈してどう自分の中に根付かせていくのだろうか。ボランティアは義務付けられた行為でないからこそ、自分という主語を置かざるを得ない。これはまさしく、自己物

語を構築するという作業そのものだろう。

社会変革のためのボランティアとは、主語である自分を超えて、大きな社会問題を解決するための手段としてボランティアを位置づける方法である。例えば、ボランティアをしていて感じた問題点を行政に提案し、解決に近づけていくというのがこれの一種だ。自分一人で行動していてもどうにもならないかもしれないが、それを「ボランティア」と名づけることで大きな枠組みの中に取り込み、一定の力を持たせることができるのではないか。二章の最後では「ボランティアというカテゴリーでもってある活動を評価すること」を否定したが、力を持たせるという意味ではそのほうが効果を持つこともありそうだ。

次章では、ボランティアに関するこの二つの暫定的な定義について検証してみる。そのための題材は、先駆的なボランティア団体による定義、現場で行った参与観察、実際の中学校教育現場の三つだ。

第一節では、三章での考察の際にも登場した大阪ボランティア協会発行の、『学生のためのボランティア論』¹⁶におけるボランティア定義を考察する。概念構築のための様々な模索を経てきた協会が、現在「ボランティア」をどのようなものとして位置づけているのかという検証作業だ。これにより、時代潮流や歴史から見えてきたボランティア像と、いま先駆者によって伝えられようとしているボランティア像に食い違いがないのかどうか確かめる。第二節では、私が現場で体験してきたボランティア活動を振り返ることで、定義の見直しを行う。これは私の個人的な体験の記述に過ぎないが、活動を「ボランティア像を見つめる」という視点から整理し直すことで考察に役立てたい。最後に第三節で、実際の教育現場に目を向ける。具体的には公立の中学校で使用されている教科書の分析だ。「ボランティア教育」と聞いて普通想像されるのは、学校教育の中に「ボランティア」や「奉仕」といった科目を設けたり、個人のボランティアの経験を学校の単位として認定したりといったものだろうが、そういった教育は現在、全ての学校では行われていない。そこで、全ての学校で使われている教科書の分析を通して、ボランティア像の認識を広める可能性を考える。その上で、私自身が経験した教育実習で感じた印象をもとに、考察を加える。そして、「自己物語のためのボランティア」「社会変革のためのボランティア」という二つの仮定義を見つめなおしてみようと思う。

第四章 教えるべきボランティア像

第一節 活動者推進者の定義から見直すボランティア像

ボランティアを語る際に必ずあげられるキーワードがいくつかある。自発性、無償性、

¹⁶ 岡本榮一、菅井直也、妻鹿ふみ子編『学生のためのボランティア論』大阪ボランティア協会、2006

公共性、連帯性、市民性といったものがそれだ。また、行政の役割と関連したものとして、いずれは行政がおこなうべきサービスに実験的に取り組んでみるという先駆性、また行政ではカバーしきれないサービスを穴埋め的に行う補完性、といった要素も付け加わることがある。これらは見てきた通り、ボランティアの歴史の中で浮かび上がっては淘汰されてきたものであり、全てを満たさなければボランティアとは呼べない、といった類いのものではなかった。その活動の性質に応じて取り上げられたり取り上げられなかったりするものであった。

『学生のためのボランティア論』においてもそのことは十分に踏まえられている。その上でボランティアに対する私たちの釈然としない思いに対し、ボランティアの本質を、「自発性と社会的な問題提起やその解決にあり、ボランティアの活動は、自分のしたい気持ちから出発して、自分のしたいことの実現を通して社会的な問題を解決する営み」だと定義している。しかし、やりたいことをただやるだけでは、それはもちろんボランティアではない。やりたいことの実現が、社会的な問題の解決につながるという意義を持たなければならない。そこでこの書においては、ボランティア活動の意義を分析する視点として、「身体活動としてのボランティア活動（自己の再組織化）」、「自己発見としてのボランティア活動（セルフエスティーム）」、「関係を深めるボランティア活動（自発性のパラドックス）」、「権利の創造とかかわるボランティア活動（公共を創る）」の四つをあげている¹⁷。それぞれがどのように、個人の欲求と社会的な問題の解決を結び付けているのか、考察する。

<身体活動としてのボランティア活動（自己の再組織化）>

通常、ボランティア活動は身体を動かして行うものでありながら、そこから得られる喜びや満足感は精神的なものとして捉えられている。だがここでは、その身体的作業に着目し、「友達が助けを求めているのに行動しなかった場合、普通ならば『苦い思い』や『悔い』が残ります」、「行動に移すというのはその逆です。痛みを分かち合う行為によって、はじめて充足感がもたらされ、こころが再組織化されるのです」¹⁸と重要性を語っている。この例示では助けを求めているのが「友達」であるが、通常ボランティアは気づ知らずの他人に対して行われる活動である。この、友達から他人への、拡大の精神こそが「ボランティア」と呼べるものなのではないだろうか。

例えば誰でも、自分の家族が困難に陥っていたらそれを助けるために体を動かして解決の道を探しにいくだろう。同じように、自分の友達が悩んでいても行動に移せるに違いない。では困っているのが友達の友達であったら？ 同じ学校に通う人であったら？ 同じ国に暮らす人であったら？ 同じ地球上に生きている人であったら？ ……一見自分とのつながりが全くないような人に対しても、つながりを見出して体を動かすことができる、

¹⁷ 岡本、菅井、妻鹿編『学生のためのボランティア論』大阪ボランティア協会、2006、15 ページ

¹⁸ 岡本、菅井、妻鹿編『学生のためのボランティア論』大阪ボランティア協会、2006、16 ページ

そういう行動のしかたが、この身体活動としてのボランティアなのではないか。そしてこの自分とのつながりを見出すという作業は、自分を主語において相手との関係性を模索するという点では、「自己物語のためのボランティア」とも関わりのあるものだろう。そこで実際に行動に移すかどうかの選択や、行動してみたことで感じた心の揺れ動きは、間違いなく自分の経験として位置づけられていく。

<自己発見としてのボランティア活動（セルフエスティーム）>

セルフエスティーム、つまりは自尊心のことだが、これを得る側面がボランティアには存在すると考えられている。例えば、老人ホームでお年寄りに何かをしてあげた、保育所で子どもたちと遊んであげた、そういった時に言われた「ありがとう」の言葉や、感謝の気持ちを伝えられることによって、自己の存在価値を見出せるというものである。この「セルフエスティーム」は、普段は、両親との会話、学校の先生からの学び、友達との交流などを通じて獲得されるが、ボランティア活動の場合、さまざまな社会的な役割を通して、「自己発見」や「セルフエスティーム」の獲得がなされているといえる¹⁹。この自己発見の役割と先ほど見出した「自己物語のためのボランティア」はとても似ているように聞こえるが、この二つはどう関係しているのだろうか。

自己物語のためのボランティアとは、他者との関係性の中で自らの居場所を確定させていこうという試みであった。義務付けられた行為でないからこそ、ボランティアには自分という主語を置かざるを得ないということだ。しかし、そもそも自分に自信が持てず不安定な存在に感じられてしまっている時、他者との関係性を築こうというところまで考えを到達させることができるだろうか。そのため自己発見は、他者と関わる上でまず欠かせない、大事なプロセスだといえる。つまり、もし「自己物語」としてボランティアを捉えていこうというのであれば、この自己発見の意義は最初にあげられるべきものなのかもしれないのだ。

<関係を深めるボランティア活動（自発性のパラドックス）>

ここでは金子郁容の論²⁰をひいて、ボランティア活動を行う際の注意として、「自らを **vulnerable** な立場に立たせ、『心の窓』を開いて、相手を受け入れることをしなければならない。そのことによって、はじめて他者から『不思議な魅力のある関係性』がプレゼントされるのだ²¹と、述べられている。この際に何がパラドックスなのかというと、ボランティアが自発的な活動である以上、そこには受身ではいられない、自ら行動しなければならないという強さが存在するが、しかし活動を行う際には自らを **vulnerable** という、ひ弱く脆い立場におかなければならないという点である。

¹⁹ 岡本、菅井、妻鹿編『学生のためのボランティア論』大阪ボランティア協会、2006、17 ページ

²⁰ 金子郁容『ボランティア—もうひとつの情報社会』岩波書店、1992

²¹ 岡本、菅井、妻鹿編『学生のためのボランティア論』大阪ボランティア協会、2006、17 ページ

この「自発性のパラドックス」こそ、「自己物語のためのボランティア」における鍵ではないだろうか。なぜ現代の人々が自己物語を作らねばならないのかといえば、他者との関係性の中で、自らの存在基盤を安定させるためであった。では他者と関係を築いたり関係を深めたりするときに実際どういう風に行えばよいのかというのが、この自発性のパラドックスだろう。相手の気持ちを聞かずにやりたいことだけやる自己中心的なボランティアに陥らないために、活動を行う上での自分の心構えには常に気をつかう必要がある。「相手を受け入れよう」と考えながら活動することは、その一歩目として適切なのではないか。

<権利の創造と関わるボランティア活動（公共を創る）>

社会におけるマイノリティの権利獲得運動にボランティアが重要な役割を果たしていることは想像にたやすいが、ここでは岡本仁宏の論²²をひいて、現代のような人と人との関係性が薄まった社会の中で人々が共同し助け合って生活していることを実証するために、ボランティアが重要な役割を果たしている、と述べている。つまり、市場の需要の中で政府や民間による供給に反映されにくいものをすくい出すことで、社会の中の自分とは違う立場の存在に目を向けさせたり、問題を共有できるようになったりということだ。

人と人との関係性と言ってしまうえば、先に述べてきた自己物語のように聞こえるが、こういう意義からとらえるボランティアは明らかに「社会変革のためのボランティア」である。自分ひとりでは解決しきれない問題、それでも解決せねばならない問題に対し「ボランティア」という役割でもって取り組んでいくことで、「身近にそのような問題が存在するのだ」「ボランティアがあえて取り組むほど重要な課題なのだ」、と人々に気づかせることができるからだ。自分と他者の関係性を模索するだけでなく、自分の力で他者と他者との関係を作り出せるというのが、ここから見えてくるボランティアの大きな特徴であると考ええる。

以上の四つの分析をまとめてみよう。

ボランティア活動を通して、人は自己を発見することができる。ボランティアをすることとは、一つ社会的な役割を果たすということなので、そこでの行動には肯定的な評価が与えられる可能性が高いからだ。そしてその自己発見を契機として、社会における自らの立ち位置を定めるための、自己物語を生み出すことができる。しかし、自己物語を構築する上では、活動の際、自らの心の有り様に注意をはらう必要がある。社会の中で自らの居場所となってくれるのは他者との関係性なのだから、それを上手く築くことなしに自己物語を紡げるはずがないからだ。また、ボランティアは自己と他者の関係だけでなく、他者と他者の関係をも生み出せる活動である。つながりを生み出すことで、他者の抱えている問題を自分に関係あるものとして捉える人が増え、解決のための動きが増え、結果的に社会を良い方向に変革していけるものである。

²² 岡本仁宏「市民社会・ボランティア・政府」立木茂雄編著『ボランティアと市民社会』晃洋書房、1997

ここから推察されるのは、ある活動をボランティアと呼ぶためには「当事者性」が不可欠ではないか、ということである。ボランティア活動は現状の社会に甘んじず、少しでも誰かの暮らしを住みよくするために行われる。ある人の行動が変化させる社会は、その変化がたとえどんなに小さくても、その人が生きる社会そのものだ。どんなボランティア活動に関わるにせよ、その活動と自分、またその活動と社会のつながり方がどのようになっているのか、模索する視点が欠かせない。つまり、三章で見た現在のボランティア概念が言おうとしている「自分のため」というのは、広く「自分が暮らす社会のため」と捉えられるのではないか。

ここで注意すべき点はいくつか浮かび上がってくる。まず、「こういう問題を抱えている人がいるのだ」という気づきが、それを所与のものとして捉えるところで終了してしまうことへの危惧である。問題は構造が生み出したものであり、その構造とは私たちが暮らす社会そのものだ。なんらかの生きづらさの問題を抱えている人は、自らの責任でそうなったわけではなく、私たちの作り出した社会のひずみを押し付けられている可能性がとても高い。そのことを忘れて、「大変そうな人がいるから助けてあげよう」という姿勢で行動することは、ある種暴力的とすらいえるのではないか。

また自己発見について、「社会的な役割を果たすことで自己発見がなされる」のだとすれば、これも少し注意が必要かもしれない。要は、他人と関わるときに「社会的役割を果たしているかどうか」で相手を評価したり価値を判断したりしないでほしいということだ。もちろんそういう観点による評価が不必要だといいたいわけではない。人がわかりやすく自己の尊厳を回復するためにも役立つだろう。しかし、世の中では様々な事情で、社会的に目に見える役割を果たしづらい人も存在する。そのような中でボランティアとは、相手のことを「社会の中のこの位置にいるあなた」だけでなく、「私とこういう関係を築いているあなた」という捉え方ができる活動だろう。そしてそれこそが、今の社会に不足しているものではないか。

次節では私自身の体験したボランティア活動を振り返ることで、別の視点から考察を加えたい。

第二節 参与観察で見出したボランティア像

私は、二〇〇九年の六月から二〇一〇年の現在（一二月）までほぼ継続して、川崎市にあるふれあい館²³という場所でボランティア活動を行っている。活動の中身は、外国にルー

²³ 「ふれあい館とは、日本人と在日外国人が、市民としてこどもからお年寄りまで、相互のふれあい交流をすすめるための場所です。基本的人権尊重の精神に基づき、差別をなくし、共に生きる地域社会を創造していくため、こども文化センターと、ふれあい館を統合施設として川崎市が設置しました。そして、この地域でさまざまな事業をすすめてきた社会福祉法人「青丘社」が、市より受託して運営しています。」（ふ

ツを持つ中学生、高校生に対して学習サポートを行うというものだ。教室は週二回、木曜日と土曜日の二時間ずつで、ボランティアスタッフは臨時の実習生などを含めなければ十名ほど。勉強をしにやってくる子どもは、現在市内の中学校、高校に通う子どもが合わせて十人くらいで、中学校に通えずフリースクールで高校入試の勉強をしている子どもが同じく十人ほどだ。子ども達のルーツはフィリピン、ネパール、タイ、中国、韓国、ブラジル、ボリビアと多岐にわたり、日本にやってきた時期も様々である。子どもの頃から日本に住んでいて、自分の母国語がまったくわからない子どももいれば、日本に来てまだ半年ほどしか経っていないのに、二ヵ月後に行われる高校入試に合格しなければならない立場にたたさされている子どももいる。大多数の子どもは、小学校高学年から中学校の間に親の仕事の都合など自分に関係のない事情で日本にやってきており、学校での特別授業や、ここふれあい館での学習などで日本語を身につけている。

私がこのボランティア活動に参加するようになった理由は単純である。学校の授業のフィールドワークで現場を訪れる機会があったのを、「じゃあ来週からも来ます」といって継続して来続けているだけのことだ。そもそもどうしてフィールドワークで訪れたかといえば、学んでいる内容が国際社会学だったからである。国際社会学の中でも、その当時は外国にルーツを持ちながら日本で生活する人々が抱える問題について研究会全体で勉強していた。別に外国人でなくてもよかったのかもしれない。「何か事情を抱えながら、私たちのすぐ隣で生活している人々」。彼ら、彼女らが抱えている問題は、彼ら自身に帰することができるのか、私たちが考えるべき問題ではないのか、そもそもその問題は、私たち自身の問題ではないのか。おそらくそのような意識が根底にありながら、私はボランティア活動に飛び込むことになった。

行っている活動は学習サポート、つまり学校の授業でわからないところを解説したり定期試験のための勉強を一緒にしたり、受験のための対策を行ったりといったことだが、そのことを通じて解決したい問題は根が深い。もし、母国での学習がある程度進んでいれば、学習サポートではある単元や用語が「〇〇語でいうと何のことなのか」というのを教えればすむが、実際にはそのようなことはほとんどない。まだおぼつかない、伝わらない日本語で、日本語能力を向上させると同時に学習概念を構築していかなければならないことになる。母語でフォローしながら勉強を教えられれば一番良いのかもしれないが、母語と日本語の二言語を高いレベルで操れ、なおかつ学習内容に関する知識もしっかりしている人材は、ボランティアの現場にも学校教育の現場にもほとんど存在しない。子どもたちの中にはフィリピン人など英語を使える子もいるが、「学習言語としての英語」までも身につけている子どもは、私の関わっている現場ではごく少数である。一番良いのは、集中的に日本語力をアップさせてから、その他の教科の勉強に取り組むということなのかもしれない。しかし、学年ごとに教わるべき内容が決まっている中で、立ち止まって足踏みをしていれ

ばたちまち取り残されてしまう。例えば留学生など日本に勉強目的でやってきた人であれば、モチベーションを保って何とかくらくらいついていくことも可能だろうが、半ば無理やり日本に連れてこられた状況で、どのようにやる気を出し、誰がそれをフォローしてくれるというのだろうか。

そんな問題意識を抱きながら「ボランティア」と呼ばれる活動を行う中で、私はボランティア概念なんてものが無いに帰すような感覚によく襲われる。私が活動を続けているのは自発的なことかもしれないが、例えば引っ越したりして馴染み深いこの現場から離れたときに、違う現場に足を踏み入れ同じような活動に携わるかと聞かれれば全く自信がない。こちらが知識などを一方的に提供しているというよりは、一緒に時間を割いて一緒に勉強している感覚だ。相手のために何かをしている、という思いは全くない。なぜなら、「何が相手のためになるのか」ということが全然わからないからだ。「勉強したくない」と言われれば、勉強させないのが相手のためかもしれない。勉強以外にこの社会で生きぬく術と一緒に探そうとするほうが大切なかもしれない。でも、勉強しなくてもいい、と相手が考えるのは、こちらがそういった問題を考えるために必要とされる知識や考え方を伝え切れていないからかもしれない。数え切れないほどの「かもしれない」が渦巻く中で、今できそうなことにただ取り組むというそれだけだ。行政ができないことに先駆的に取り組んだり、穴埋め的にカバーしたりという感じでもない。仕組みやシステムとして変えていかなければならない部分は、例えば中途半端な学齢期で日本に来た子どもへの母語教育の機会配分だったり学校に一人でもそれを必要とする人がいれば日本語教育を行うようなシステム作りだったり、あるいは彼ら、彼女らの生活全般に関わる部分でオーバーステイの人々への対応の仕方だったり日本に住む外国人に対しての政治参加の保障の仕組みだったりといった、個人の力ではどうしようもない部分だと思うからだ。

しかしそうはいっても、問題を全て「自分一人ではどうしようもないもの」として放り出してよいのだろうか。ある日、子どもたちの高校受験について話し合っていたときに、コーディネーターの方がこうおっしゃった。「これもう、外国人問題じゃなくて日本人問題ですよ。だってあの子たちの親、日本人なんだから」。子どもたちの進路を考えるときに、親の存在は欠かせない。ふれあい館でも面談やガイダンスに参加してもらうために子どもたちの親を呼び出すことがあるが、親が話に応じなかったり、約束をすっぽかしたりといったことがしばしばある。どんなに子どもの進路の重要性を語っても、である。そして、一人ひとり事情は様々だが、彼ら、彼女らの親は離婚や再婚などの関係で、日本にルーツを持つ日本人であることもとても多いのだ。

そのようなことが日々起こりながらボランティアを続けていて思うのは、「これは自分の問題だ」、ということである。なぜ取り組むのか、取り組み続けてどうなるのか、どうしたいのか、どこまで深く考えていくのか。「日本に住んでいる人の問題だから」、「身近な人の問題だから」というわけではなく、一度関わってしまったことに対する責任感といったも

のも含めて、自分の問題であるという思いがしだいに強くなってきている。

つまりこういうことだろうか。私がボランティアをするのは、「ボランティアをする私」は、間違いなく私が自身で選び取った「立ち位置」である。その一方で、ボランティアで関わっている外国にルーツを持つ子どもたちが今いるのは、どう考えても「立たされた位置」である。彼ら、彼女らに限らず、多くのボランティアを必要とする人々は、何らかの要因でその立場に立たされている人である。自らの立ち位置を模索することで自己物語は紡がれていくが、そのスタートが「立たされた位置」であれば、肯定的な物語の構築はより困難を要するだろう。しかし、力を必要とするがゆえに、立たされた位置から何らかの前向きな一歩が踏み出せたときは、力を貸した他者をも巻き込むような大きな感動が生まれる。それこそがボランティアを通して「得られるもの」なのではないか。参加者だけではなくボランティアされる側も同じように「ボランティア」に向き合い、その結果得られるものも両者に平等に行き渡る、そのような活動がボランティアというものの理想の姿ではないだろうか。

また前節で注意を喚起した「社会的役割」についても、もう少し説明を加えられるようになるだろう。つまり、ボランティアそのものが社会的な役割なのだ。ボランティア活動においては、勉強を教える人と教えられる人だったり、介護をする人とされる人だったり、話を聞かせる人と聞かされる人だったり、見かけ上の立場の上下関係ができてしまうことが多い。そしてそれは職業であれば、プロとしてその立場に専念しなければならないものである。しかしボランティアは仕事ではない。その曖昧さが活動の未熟さにつながり批判を受けることもあるが、仕事でないがゆえに、立場を超えて相手と一対一の間を築けるものであると考える。ボランティアが、社会に人と人との関係を作り出すという、社会的な役割を担っているのだ。

ここまでで見出したボランティア像は、社会に共有されているとは到底言いがたい。そこで次節では、ボランティアの実像を教育によって広める可能性はあるのかどうか考察する。私がボランティア教育の現場として想定している、中学校で使われている教科書の分析を主とする。

第三節 ボランティア教育の現場の考察

ボランティアという言葉と同じように、「ボランティア教育」という言葉が想起させるものも人によって様々だろう。ボランティア志望の人に対して行われる特別な教育だったり、学校教育の中に「ボランティア」や「奉仕」といった科目を設けたりして行われる教育であることが多いだろうか。しかし、今までの論で見えてきた「ボランティア」とは、そう

いった特別な教育の下でしか形成されないものではないだろう。むしろ、一見関係のなさそうな、現代の社会情勢をきちんと理解し関心を深めるところから、ボランティア活動は始まっていくのではないか。そういった仮定のもとで、全ての中学校で使われている教科書の分析を試みようと思う。

中学生が現代の社会について学ぶのは、社会科の中でも公民分野である。公民分野では、現代の社会的事象や社会問題に対する関心を高めてそこに向かう態度を形成したり、個人と社会の関係について理解を深めたり、国際的な相互依存関係にある国に生活する自分について考えたりといった学習を行う²⁴。ボランティアは様々な教科において扱われる可能性があるが、この公民分野の中では、現代の社会情勢と絡めて学習することができる。

二〇一〇年現在、現行の公民分野の教科書は七社から八冊出版されている。そのうち教科書内の記述に「ボランティア」という単語がでてくるのは五冊だ。一冊ずつどのような単元のどのような文脈でボランティアが取り扱われているのか見てみよう。

<日本書籍新社『わたしたちの中学社会 公民的分野』>

「こうして、地域住民が主人公となって地域の活性化が進められ、さまざまなボランティア活動も生まれている」²⁵

「住民運動は、(中略) ボランティア活動などへ広がっている」²⁶

この教科書では「ボランティア」という言葉がすでに認知され明確になった一般名詞のように取り扱われている。ボランティアという言葉そのものに対する解説は全くなく、地方自治について地域住民が自ら地域のことに取り組むときにボランティア活動が生まれるという文脈と、住民運動について説明する中で、住民運動が現在はボランティア活動の役割の一部にまで広がっているという文脈の中で登場する。

<日本文教出版『中学社会 公民的分野』>

「ボランティアは、自分の意思で無償で行う地域や社会のために役立つ活動のことです」²⁷

²⁴ 公民的分野 目標 (1) 個人の尊厳と人権の尊重の意義、特に自由・権利と責任・義務の関係を広い視野から正しく認識させ、民主主義に関する理解を深めるとともに、国民主権を担う公民として必要な基礎的教養を培う。(2) 民主政治の意義、国民の生活の向上と経済活動とのかかわり及び現代の社会生活などについて、個人と社会とのかかわりを中心に理解を深めるとともに、社会の諸問題に着目させ、自ら考えようとする態度を育てる。(3) 国際的な相互依存関係の深まりの中で、世界平和の実現と人類の福祉の増大のために、各国が相互に主権を尊重し、各国民が協力し合うことが重要であることを認識させるとともに、自国を愛し、その平和と繁栄を図ることが大切であることを自覚させる。(4) 現代の社会的事象に対する関心を高め、様々な資料を適切に収集、選択して多面的・多角的に考察し、事実を正確にとらえ、公正に判断するとともに適切に表現する能力と態度を育てる。(「中学校学習指導要領 第二節 社会」より抜粋 http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301/03122602/003.htm [2010. 12. 28 アクセス])

²⁵ 『わたしたちの中学社会 公民的分野』日本書籍新社、2006、29 ページ

²⁶ 『わたしたちの中学社会 公民的分野』日本書籍新社、2006、131 ページ

²⁷ 『中学社会 公民的分野』日本文教出版、2006、149 ページ

この教科書は半ページを割いてボランティアについて紹介する項目を設けており、その中にボランティアを定義するこのような記述が見られる。別の単元では、阪神淡路大震災についての文脈でボランティアが果たした仕事について述べたり、あるいは社会資本の整備のためには支援組織が欠かせないという文脈の中でボランティアの役割について触れたりといった記述も存在するため、ボランティアが一般名詞として既に市民権を得る一方で、その内容についてもきちんと紹介する必要があると解釈されていることが読み取れる。ボランティアが社会にとって必要な活動であるという認識があるからだろう。

<日本文教出版『中学生の社会科 公民 現代の社会』>

「ぼくもボランティアをしたことがあるけど、かえってお年寄りの方に教わるが多かったなあ」²⁸

「自分たちのできるボランティア活動には、どのようなものがあるだろうか」²⁹

一つ目の記述は欄外の子どもの写真のふきだしで、二つ目は同じく欄外で子どもがゴミ拾いをする写真に添えられている。あえてボランティアを定義するような記述ではないことで、ボランティア概念の多様性がうかがえるようになっている。一つ目は、ボランティアをすることで得られるものに焦点が当たっており、二つ目からは自らを、ボランティアをする主体として捉えることができる。

<帝国書院『社会科 中学生の公民 地球市民をめざして 初訂版』>

「それ（筆者注：福祉社会）を実現するには、（中略）私たち一人ひとりがボランティアなどさまざまな活動に参加し、福祉社会をつくりあげていこうとする意欲と行動が必要なのです」³⁰

この教科書では福祉社会を「高齢者や障害のある人など、社会的に弱い立場の人たちをふくめ、だれもがたがいを尊重し合い、ともに生きられる社会」と定義し、そのような社会を実現するための活動の一つとしてボランティアをあげている。ボランティアは一般名詞として使われており、とくにそれがどういう活動かについては述べられていない。

<東京書籍『新編新しい社会 公民』>

「ボランティアとは、自分の意思にもとづいて、その技能や時間を進んで提供し、社会に貢献することです。ボランティア活動にはどのようなものがあるのでしょうか。わたしたち

²⁸ 『中学生の社会科 公民 現代の社会』日本文教出版、2006、25 ページ

²⁹ 『中学生の社会科 公民 現代の社会』日本文教出版、2006、33 ページ

³⁰ 『社会科 中学生の公民 地球市民をめざして 初訂版』帝国書院、2006、80 ページ

ちにもできるのでしょうか」³¹

「それでは、ボランティア活動をするにはどんな意味をもっているのでしょうか。(中略)人生のさまざまな段階においてボランティア活動を行う意義は、たいへん大きいといえます」³²

「その(わたしたちも住んでいるまちを今までよりももっとよくする)ためには、ボランティア活動などをおしてまちをよくする活動を行うことが大切になります」³³

前の二つは、「ボランティアにチャレンジしよう」というテーマで二ページを割いて書かれている中の記述である。ここでは、一つ目の記述のようにボランティアを定義するところから始まって、ボランティアの意義についてアンケート結果を元に述べ、最後にボランティア活動の種類と方法を表にして掲載している。ボランティアの意義については、二つ目の記述からわかる通り「自分のため」という側面が強く強調され、掲載されているアンケート結果³⁴からもそれ以外の意義を見出すことが難しい。三つ目の記述は地方自治に関する單元内のもので、「自分のため」から一歩踏み出した視点とも取れるが、広く社会を見つめたものとはなっていないようだ。

この東京書籍の教科書は、一九八四年発行のものに初めて「ボランティア」という単語が掲載されて以来ボランティアについての記述が全ての版で存在しており、教科書におけるボランティアの扱われ方を継続して追えるものとなっている。記述の変化を見ていってみよう。

一九八〇年代前半に「**ボランティア(奉仕者)活動**」³⁵という風に「奉仕」の但し書きがつき太字で登場したボランティアは、「難民救済のためのボランティアの海外派遣などもさかんにおこなわれている」³⁶と国際社会の單元で扱われたり、「日本ではボランティア活動は従来、活発とはいえなかったが、福祉の大切さについての国民の関心が高まり、最近では多くの活動がなされるようになってきている」³⁷と福祉社会の文脈で扱われたりしていく。一九九〇年代に入っても「ヨーロッパやアメリカなどでは、**ボランティア(奉仕者)活動**や宗教団体などの、こうした領域での活動が活発である。日本でも、福祉の大切さについての国民の関心が高まり、最近ではさまざまなかたちでボランティア活動が行われるように

31 『新編新しい社会 公民』東京書籍、2006、60 ページ

32 『新編新しい社会 公民』東京書籍、2006、61 ページ

33 『新編新しい社会 公民』東京書籍、2006、94 ページ

34 全国社会福祉協議会資料「ボランティア活動をしてよかったこと」(ボランティア活動の参加者 3000 人の回答、複数回答、2002 年)のアンケート結果を元にした表には、「多くの仲間ができた」「活動自体が楽しかった」「自分の人格形成や成長にプラスになった」「地域社会とのつながりをつくることができた」「新しい知識や技術を習得できた」「社会に対する見方が広がった」「自分や社会や他の人に役立っていることを実感できた」という七項目が掲載されている。(『新編新しい社会 公民』東京書籍、2006、61 ページ)

35 『新しい社会 公民』東京書籍、1984、186 ページ

36 『新しい社会 公民』東京書籍、1984、202 ページ

37 『新しい社会 公民』東京書籍、1987、191 ページ

なっている」³⁸という風に、国内でボランティアがさかんになったことは読み取れるが相変わらず名称は但し書きのついた太字のままである。一九九七年の版でようやく「所得を得るための労働だけでなく、ボランティア活動や地域活動に積極的に参加していくことも大切なことである」³⁹、「ボランティア活動として通訳の仕事をしたり、ホームステイで外国の人を自分の家に泊めていっしょに暮らすことなどを通して国際交流を行う人たちも多くなっている」⁴⁰と但し書きや太字の記述が一切消え、ボランティアが一般名詞として浸透しきったことがうかがえる。

ここまでの版に共通しているのは、ボランティアをある意味「他人事」のように記述し、これを読んだり勉強したりしても「ボランティアに参加してみよう」という意識をなかなか持てそうにないことである。これが二〇〇〇年代になると、「実際にボランティア活動をしたくても、何をしてよいかわからないという人は、右の表を参考にしましょう」⁴¹、「さあ、ボランティア活動を始めてみましょう」⁴²という記述が登場し、現行の教科書にあるような、教科書を使用している生徒自身がボランティアをするという視点が生まれている。これはボランティアの変化というより教科書の書き方自体が変化したことによるものかもしれないが、これを使って学習する以上生徒に与える影響は同じものだろう。以上のような変遷を経た上で、東京書籍の現行の教科書は上記のようにボランティアを扱っていることになる。

教科書から読み取ったボランティア像をまとめてみよう。現在使用されている教科書に描かれているのは、一般名詞として何げない文脈で登場する以外は、「理想の社会を実現するための活動の一つ」としてのボランティア活動が主である。そして、そこで理想とされている社会は、誰もが暮らしやすい福祉社会であったり、活発で力を持った地域社会であったりと様々だ。前節までで見てきたボランティアは、あんなにも揺らいで定義の定まらないものであったのに、ボランティアのそのような側面についての記述はほとんど目にすることができない。「ボランティアに参加する」という視点が確保されている記述は現在多いが、ボランティアの向こう側に存在する人々や問題や、それを生み出した社会構造にはほとんど目がいていない。また、ボランティアについて全く記述の載っていない教科書も多いし、たとえ教科書に記述が載っていたとしても、扱うかどうかは時間の制約や教師の考えによる所が大きいということを忘れてはいけない。

では以上のような教科書を用いて行われる中学校社会科の教育、ひいては三年間を通じた中学校教育の全体で、子どもたちにボランティアについて何かを伝えることはできるのだろうか。二〇一〇年度に神奈川県公立中学校にておこなった、三週間の教育実習を通

38 『新しい社会 公民』東京書籍、1993、185 ページ

39 『新しい社会 公民』東京書籍、1997、120 ページ

40 『新しい社会 公民』東京書籍、1997、177 ページ

41 『新しい社会 公民』東京書籍、2002、45 ページ

42 『新しい社会 公民』東京書籍、2002、45 ページ

して感じた印象を元に考察する。

社会科で教えなければならない内容は地理分野、歴史分野、公民分野と非常に膨大だ。そして「ボランティア」は全て合わせれば数百ページに及ぶ教科書の中で、たった二度か三度登場するのみだ。中学校教育の現場はとても忙しく、教師も満足に指導案を練る時間が取れない中で、ボランティアについて社会の授業のみで子どもたちの心に印象を残すことは到底できないような気がする。しかし、社会科では、私たちが暮らす社会そのものについて学ぶ。そこにどんな人々が住んでいて、どんな問題を抱えていて、私たちがそれにどう関わるべきかを学習する。単に「こういう問題が存在しています」で済ますのではなく、「その問題にどう取り組むか」という課題設定を通じて話を広げていくことは、「ボランティアとはこういった活動です」と通りいっぺんの説明ですませるよりも重要で、印象に残りやすいのではないだろうか。そこであえて「ボランティア」という言葉を使わなくても良い。大切なのは名称ではないのだから。

また、授業内容以外の面でもボランティア精神を養うことは可能だろう。この年頃の子どもたちが、学校という狭苦しいところに押し込められて集団で学習する、という意味を考えることが大切だ。社会に出るための準備期間と捉えたり、社会の縮図と称されたりもするが、それ以上の意味がそこにはあるだろう。特に公立の中学校には、学区内に住んでいる様々な立場や境遇の子どもたちが集まってくる。色んな境遇の持ち主と、そんなものとは関係なく「クラスメイト」や「友達」という関係を結べ、しかし関係を築いていく上では、表面的な関係性を越えて、相手の考え方や立場などに目を向けることが欠かせない。たとえ中学生といえども、それは必要なことである。いかに関係性の向こう側に目を向けるか。そこを指導することは、とても難しいが、欠かすことのできないものではないだろうか。また、中学校では、校則違反を学年全体の前で注意したり、逆に掃除や挨拶をしっかりするなど生徒の良い行動を学校全体の前で誉めたりするなど、一人の子どもの事例を全体で共有することがしばしばある。これは、一人の行動がその人自身にばかり帰するのではなく、社会全体で共有すべき問題であったり財産であったりするという意味でとてもボランティア的ではないだろうか。この際にどういった子どもの行動を取り上げるのか、といったところが重要になってくると思う。

第五章 まとめ

本論の目的は、ボランティアの実像を明らかにし、それを教育によって伝える可能性を模索することであった。

まず、現在の社会の潮流を概観することで、現在の社会が多くの人にとって生きづらいものとなっていることがわかった。人々はその生きづらさを、社会システムではなく特定

の他人に押し付けがちなものである。また一定の人々は、そもそもシステムの中に生きづらい存在として固定されていたり他人から社会の負の部分の押し付けられたりすることでより生きづらくなっている。そしてそのような問題を解決するためにボランティアがある役割を担えそうだとすることと、自らのアイデンティティの基盤を失った人々が新たに自己物語を作り出すためにもボランティアが新しい手段として効果を発揮しそうなことが見えてきた。

しかしいくらボランティアがそのような効果を持っていたとしても、概念と実態に関するずれの問題によって、正しく評価されなさそうということがわかってきた。そこでボランティアの定義を明らかにするべくボランティア史を眺める中で、「自己物語のためのボランティア」と「社会変革のためのボランティア」という暫定的な二つの定義が生まれた。これらは明確に区別されるものではなく、多くの人が自己物語を構築する必要にさらされているというのも社会問題のうちの一つであるし、社会変革といえども、その社会はそこに所属する個人と密接に関係しているという意味で個人的な問題でもある。また、自分と他者との関係性を築いていくことで自己物語は紡がれていくが、ボランティアにおいてはそれだけでなく、他者と他者との関係性を生み出せることも明らかになった。そして、他者と他者との関係が生まれることで、それが社会変革の可能性につながるということが分かった。

このような一見正反対に感じられる事柄の関連は、他の点でも見受けられる。それは、ボランティアによって得られるものが、ボランティアに参加する人とボランティアを必要とする人で共通なのではないかという発見だ。参加者が行う自己物語の構築とは、言い換えれば自らの立ち位置の模索ともいえる。それに対してボランティアを必要とする人は、何らかの要因でもって自らが生きづらい場所に立たされてしまった人だ。「立たされた位置」を「立ち位置」に変えていく作業は、大きな力を必要とするがゆえに、そのプロセスに関わった人全てに大きな影響を及ぼす。前向きな一歩が踏み出せれば、その感動は全ての人に共有されるし、社会変革にも結びつく。

しかし、このようなボランティア像が社会に共有される可能性があるかといえば、あまりそうとはいえない。中学校教育においてボランティアの扱われ方は不均等であり、そもそも「自己物語」や「社会変革」と結び付けられて論じられることがほとんどない。あえて「ボランティア」と名前をつけないところで、そのような精神を育む可能性は大いにありうるが、時間の制約や教師の考え方、力量などに大きく左右されることは否めない。また、ボランティアは「ボランティア」としてイメージを形成したほうが良いという視点もある。なぜなら、社会変革のためには「ボランティアがわざわざ取り上げている問題」として、人々に他人の問題に興味を持ってもらうことが重要だからだ。ボランティアが力を持っているという認識を広めるためにも、ボランティア的な精神を社会に浸透させるだけでなく、「ボランティア」という概念を構築することはやはり大切なのだ。つまり本論で明らかになったのは、ボランティアの実像の曖昧ながらしっかり社会に根をおろした姿と、それを教育によって伝えることの困難さであった。

最後にここから見出せる課題と展望をあげておこう。まずは、ボランティアの概念についてだ。本論を通して見えてきたボランティアとは、それを通して人と人とが結びつき、共にボランティアという行為をおこなうことで自己物語の構築と社会の変革への一步を同時に歩みだせる、そのような可能性を持つものであった。つまり、そのようなことを達成できる活動をボランティアと定義してしまえばよいが、現状はそうっていない部分もあるという点で、まずはそこから変えていかねばならないような気がするのである。「高齢者や障害のある人など、社会的に弱い立場の人たちをふくめ」、「ともに生きる社会をめざして」と簡単に言うが⁴³、なぜその人たちが社会的に弱い立場に立たされているのか考察する視点は、そこには必要ないのだろうか。ボランティアが社会的に必要とされていることは事実である。しかしそれは、行政の役割を補完するためでも何か大きな問題を解決するためでもなく、第四章二節の最後でまとめたように社会の中に人と人との関係を作り出すためではないか。「ボランティアで得られるもの」や「自分のためのボランティア」という言説が一般的に広まったことで、ボランティアが自分に与える影響ばかりに目が向き、相手のニーズを考えられないという問題があるが、そもそも何か困った問題を抱えていてボランティアでそれを解決してもらいたいと思っている人自身も、「なぜ自分がそのような問題を抱えるにいたったのか」を考えることが必要なのではないか。

「生きづらさ」は、アイデンティティではなくポジショナリティである。つまり、社会の中で生きづらさを感じることは、その人自身の責任に帰すべき問題ではなく、社会の中に生きづらさの立場や立ち位置が存在するという問題なのである。そして大抵の人はその位置に、自ら立ちたいわけではなく何らかの要因で、立たされているのだ。

社会がそのような立ち位置の持ち主であるということは、誰かの生きづらさの問題は、社会の構成員全体で共有すべき問題なのである。問題というよりも、「財産」と言い換えたほうがいいかもしれない。誰かの生きづらさを見つめることは、その問題を解決するための模索を通して、社会に前向きな力を及ぼす。誰かの「立たされた位置」を「立ち位置」に変えていく作業は、その困難さゆえに強力な力を持つ。それを見つめて向かい合うことで社会を少しずつでも良くすることのできる、財産なのである。そしてその、「見つめて向かい合う」という姿勢に、現代のボランティア像が立ち上がってくると思うのだ。

このようなボランティア像はまだ可能性に過ぎない。しかもこのボランティア像を社会に広めていく可能性も、本論では得られていない。しかし、ボランティアそのものが主体となって、それを通して向かい合っている両者ともに何か得られるものがあるような、そういう活動がすでに存在していることもまた事実だ。このようなボランティアの可能性を深化させ広げていくための模索を、今後の課題としたいと思う。

⁴³ 『社会科 中学生の公民 地球市民をめざして 初訂版』帝国書院、2006、80 ページ

<参考文献>

- ガッサン・ハージ著、塩原良和訳『希望の分配メカニズム』御茶の水書房、2008
エミール・デュルケーム著、佐々木交賢訳『教育と社会学』誠信書房、1976
関嘉寛『ボランティアから広がる公共空間』粹出版、2008
Zygmunt Bauman, *Liquid Modernity*: Polity Press, 2000
ジョック・ヤング著、木下ちがや、中村好孝、丸山真央訳『後期近代の眩暈』青土社、2008
雨宮処凛、萱野稔人『生きづらさについて』光文社新書、2008
中嶋充洋『ボランティア論—共生の社会づくりをめざして』中央法規出版、1999
中山淳雄『ボランティア社会の誕生～欺瞞を感じるからくり～』三重大学出版会、2007
岡本榮一、菅井直也、妻鹿ふみ子編『学生のためのボランティア論』大阪ボランティア協会、2006
金子郁容『ボランティア—もうひとつの情報社会』岩波書店、1992
岡本仁宏「市民社会・ボランティア・政府」立木茂雄編著『ボランティアと市民社会』晃洋書房、1997

<参考教科書>

- 『高等学校 改訂版 現代社会』第一学習社、2002
『わたしたちの中学社会 公民的分野』日本書籍新社、2006
『中学社会 公民的分野』日本文教出版、2006
『社会科 中学生の公民 地球市民をめざして 初訂版』帝国書院、2006
『新編新しい社会 公民』東京書籍、2006
『新しい社会 公民』東京書籍、1984
『新しい社会 公民』東京書籍、1987
『新しい社会 公民』東京書籍、1993
『新しい社会 公民』東京書籍、1997
『新しい社会 公民』東京書籍、2002